《翻訳》

知識を所有するということについて

W．W．シャロック
岡田　光弘訳

社会学者たちは慣行として、社会の成員の諸活動は何らかのかたちで、何かしらの知識の集成に関係があるとして扱っている。すなわち、成員の知識と成員の行動との間には、何らかの関連があるにちがいないということが想定されているのである。「文化」「視角」「イデオロギー」そして「世界観」といった考え方を用いることで、成員の活動は何らかの知識の集成を参照することで解釈されるべきであるという考えだけでなく、その知識の集成自体が、その個々の行為者たちがメンバーシップを有する協同体（collectivity）と何らかのかたちで結びついていると見られなければならないという考えをも伝えようとしてきた。社会学者たちにとってのそこでの問題とは、成員の知識とその活動との間に関係があるかどうかを見いだすことなどではなく、ある協同体の知識の集成とその成員の諸活動との間にある関係を解釈することであった。この関係は、社会学者たちにとって、大きな問題であり続けてきた。すなわち、ある種の関係が存在していることは明白のようなのだが、それが何であるのかを言い表わすことは思いのほか困難なことなのである。しかしながら、成員の諸活動と協同体の知識の集成との関係を問題化することは、将来的に興味深いある問い、そもそも私たちは、いかにしてある知識の集成を、その*協同体に属する*集成として理解するようになったのかという問いから注意をそらせるものである。ある協同体に属する集成とその成員の諸活動との間にひとつの関連がみいだせるという仮定は、以下のことを前提としている。それは、その知識の集成と社会構造との間に、その集成を何らかの協同体へ帰属させることを可能にする関係が、すでに存在しているということである。

知識の集成の協同体への帰属は、社会の成員の知識を彼らの諸活動に関連づ

けるという問題をとらえる仕方に深く影響を与える。この問題全体を処理しえる別の方法も存在する。たとえば、協同体と集成の間に、なんらかの特別な関連があると仮定する理由などないし、どの諸活動の組み合わせを、どんな集成と関連づけて理解してもよいと提唱することもできるだろう。そうなると、どの知識のまとまりがどの諸活動と関係しているかを発見することこそが研究者の課題となるであろう。とすれば、もし全くかりにアメリカ人の活動というものについて考えるとして、中国卜占、ザンデ族の妖術、ロシアの人民主義、シャイアンの慣習法、アボリジニーの親族ルールといったような思想体系のうちのひとつあるいはいくつかに言及することで、アメリカ人の活動が理解できてしまうなどという想定が可能になる。もちろん、すべての、それとして同定可能な知識の集成をこの可能性のリストに含めることができるので、このリストをここで終わらせる必要はないだろう。なぜなら、知識の集成のどれひとつをとっても、アメリカ人の諸活動に「関連がある」と判明するかもしれないからである。研究者による調査は、それぞれの集成とアメリカ人の活動との間にある関係を発見するだろうし、それによって、私たちはそういったリストにある様々な知識のまとまりのうち、どれがアメリカの「文化」を形づくっているものなのかが分かるだろう。

万が一、適切な調査上の手続きを定義しているのだといって、そうした申し出を真剣に推し進めようとすれば、真面目な社会学者たちによって、はねつけられることは間違いない。というのは、アボリジニーの親族ルールとして知られる知識の集成がアメリカ文化を構成していることが判明するなど、想像するだけでも馬鹿馬鹿しいように思われるからである。しかしながら、私たちがまた、協同体と集成の関係についての絶対的な概念を持っていないとするならば、そういった申し出がもっとも真剣に考察されるように働きかけるべきであろう。結局のところ、協同体と集成の関係が調査されなければならないし、調査に先んじて、どの知識の集成が、どのような仕方で、どういった諸活動と関係しているかを知ることはできないのである。実際、上記のような種類の手続きを適用することによって、いったい何が、あるひとつの知識の集成を協同体に属する成員の諸活動に「関連がある」ものにして、私たちがその集成を協同体に属する文化だと見なすことにつなげているのかということについての、より透徹

した理解がもたらされるであろう。こうした手続きのもとで、まず、ひとつの集成を文化に組み入れる要因は何であるかを決定し、そのうえで、特定の集成が、とくにその協同体の文化として正統に考えられるか否かを発見することができる。一方、現行の手続きのもとではどうかというと、これとほとんど正反対の仕方でことが行なわれている。すなわち、ある集成を特定の協同体に属する文化として適切に認定したそのうえで、いったい何が、文化、協同体、そして成員の諸活動を関連づけているのだろうかと思い悩むのである。

現状において理解がなりたっているという事実は、集成、協同体、そして諸活動の間の関係を社会学者たちが常識という資格で取り扱っているということを示している。すなわち、社会の成員であることによってえられる知識を利用するという点において、それは常識なのである。私たちは、上記のような種類の調査手続きを直観的に馬鹿馬鹿しいと思わせるような、集成と協同体との関係についての絶対的な概念を持っている。たとえば、「物理学」は物理学者の行いに、また、「アボリジニーの親族ルール」はアボリジニーの行いに、それぞれ関連がある知識の集成であることは明らかである。アボリジニーの親族ルールが、物理学者の文化を形づくるものでないことは調査の必要もないし、この事実が全く明白であることは、社会の成員であることによってえられる常識的な事柄である。それでは、私たちにとって常識的な概念は、いかにして達成されるのだろうか。

アメリカ人たちの文化の候補として挙げられた前述の知識のまとまりのリストが、そういった知識のまとまりのひとつひとつについての記述に含まれていないことは明らかである。また、このリストは、次の方法で構成されたものではなかった。すなわち、それぞれの知識の集成は、一組の要素から組み立てられているわけではなかった。知識のまとまりは、中国の卜占といったように、名前を使用することにより、極めて適切に同定された。それゆえ、知識のまとまりを命名することは、慣行的かつ常識的な実践であると認識しなければならない。しかしながら、ひとつの知識の集成が、ひとつの名前を持つというまさにその事実は、使用されている名前の*種類*についての吟味をはじめない限りは、集成と協同体との関係について何も語ってくれはしないのである。採用される名前はふたつの部分に大別される。そのひとつは、知識の集成がそれを行なう

ために用いられてきた類いの事柄を指しているようにみえる。たとえば、地理上の関係に言及することで生活を順序立てたり、妖術師たちを取り扱ったり、社会の成員の間の民事関係を規制したり、同族関係を調整したりといった事柄である。しかし、もう一方は、中国、ザンデ族、アボリジニーといった協同体の名前の使用を含んだものであり、ここではより興味深い部分である。そのときには、知識の集成は、協同体と*同じ*名前を与えられるという仕方で同定されたのである。この事実について、私たちはとりたてて違和感をもたない。というのも、自分の息子に他の誰かと同じ名前をつけることは、自分または自分の息子と、その誰かとの関係を必ずしも明らかにするわけではないからである。しかし、同じ名前を与えることは、「名前の後継ぎ」という働き、つまり、ある集団を命名するということがなされ、それによって名前の同一性がもたらされてきたということを示唆しているのかもしれない。「名前の後継ぎ」が行なわれてきたということは、名前の同一性が生じた場合には、成員がそこに「名前の後継ぎ」が担保されていると思うというひとつの可能性を表している。そして、折にふれてそれをひとつの事実であるとして扱うことができるなにかがある。したがって、英国人の間で、王室の一員と同じ名前が高い人気を示しているという事実は、人々が彼らの子供に王室の誰かにちなんで同じ名前をつけているという結論を担保するものである。知識の集成と協同体とが、ひとつの名前を共通に分け持っているとしても、その名前が、集成と協同体とのなんらかの結びつきがあることを示しているとは限らない。がしかし、きっと人々は、そうとは受け取らないだろう。たとえば、シャイアン族の慣習法はシャイアン族の間で適用されているものだと考えるだろう。彼らがそう考えるのは、「名前の後継ぎ」の一例である個人の命名に関していえば、同じ名前を与えることが、単にふたりの人間が同じ名前をもつということだけを意味しはしないからであろう。すなわち、その命名は、その人々の間にある諸関係に根拠をもつとみなされるだろう。それゆえに、ある著名人にちなんで同じ名前を自分の子供につけるのは、その著名人を崇拝したり、尊敬したりしているからであるとみなされるだろう。

さて、私たちには少なくとも、人びとは集成と協同体とが同じ名前を持つという事実にもとづき、いくつかの知識の集成が協同体の文化を構成しているこ

とを発見しているとする可能性を見つけだした。集成と協同体の場合に、同じ名前を付与するということで何が認識されているのだろうか？

まずは、名前は記述的に使用されていると考えるのが、もっとも本当らしいように思われる。シャイアン族の間にある慣習法は、シャイアン族の間で適用されているがゆえに、そう名づけられており、ザンデ族の妖術は、ザンデ族の社会の成員の間にそういった妖術への信念がもたれているためにそう命名されている。したがって、こうした命名をされた知識の集成は、同じ名前を有する協同体の成員たちのすべてによって、かつその成員たちだけに知られていると考えてしまいがちである。社会学的な記述をざっと概観するだけで、こうした推定は否定されることになる。というのは、ある協同体に属さない人々がその協同体にちなんだ名前をもつ知識の集成を受け入れ、それを活用している例が容易に発見されるからである。たとえば、エヴァンズ＝プリチャードのザンデ族に関する報告のなかには、呪医（witch−doctor）の行いに関する次のような記述がある。

> 最近、ボグワォズは、近隣を訪れて、自分がすぐれたまとめ役で機略に富む策士であることを示した。彼はただちに、地元の呪医たちを制圧し、その遠大な主張、堂々とした風采と個性により、彼のリーダーシップを受け入れるように威嚇した。彼は、自分の呪術は古くからの呪医たち、*ボンドク*、のザンデ呪術ではなく、バカの人々の間でボグワォズという彼が襲名した男から学んだ、より強力なものであると人々に語って聞かせた。 [Evans=Pritchard,1937:219]

そしてさらに、

> 私は、バドドに、なぜ彼を勝手に侮辱する男に服従するのかと尋ねてみた。彼は、ボグワォズは呪医たちの慣習に従って活動している、なぜなら、誰かが槍をあげれば、彼はそれ以上は要求せずに、すべての薬（medicine）を見せるからだ、と言う。しかし、それが事実でも、彼自身のやり方は違っていた。彼は、このようにいつも槍を要求するとは限らなかった。ボグワォズは、いつも品物を要求したが、それは

なぜだったのか？彼の薬は、彼らの物と同じだった。ムビロも、ランガも、トゴも同じであった。しかしながら、彼らの薬とは小さな違いが確かに認められ、そのことが人々をして彼を君臨させその話に耳を傾けさせるのであった。それは、バカの薬であった…。ともあれ、彼（バドド）は、自分のザンデの薬の在庫にバカの薬を加えることを切望していた。 [Evans=Pritchard,1937:223f]

それゆえ、医学的な知識の集成をザンデの薬として命名することは、*単に*記述的なことがらではない。その名前は、ある種の知識がザンデの呪医たちの間で流通していることを意味しているとしても、それらがザンデの間でだけ流通していることを意味しない。というのは、エヴァンズ＝プリチャードのインフォーマントによると、ザンデとバカの薬の間には類似性が認められるからである。もし万が一、その名前が記述的であることだけを意図していたとするなら、エヴァンズ＝プリチャードは名前を修正したであろうし、その医学的な知識の集成を、いまなら多分、ザンデ・と・バカの薬とでも同定したであろ。あるいはまた、多分そのいずれの協同体の名前にも言及しない別の名前を考案したであろう。そうすると、同じ観念がふたつの異なった名前で同定されており、それらが同じものであるという事実が、ここでザンデとバカの薬の類似性として定式化されている。ボグワォズを通じて学び取られ、ザンデ族にはそれ以前には知られていなかったバカの薬のいくつかの要素がある。それならば、それらの要素をザンデ族の薬の要素として改名することになるはずだと思われるかもしれない。しかしながら、エヴァンズ＝プリチャードのインフォーマントによれば、このことは、バカの薬をザンデ族のそれへ変換することを経由してザンデ族の薬の拡張したとして記述されてはおらず、そうではなくてただ「バカの薬をザンデの薬の在庫へ加えた」として記述されている。このように、医学的な知識上のこれらの要素がザンデ族でますます流通しているにもかかわらず、「バカの薬」として同定されるところの、それらの元来の名前を保っているのである。ここで、これらの名前の使用に関する首尾一貫しない方針に対して不満を述べることにはおそらく根拠があるだろう。しかし、こうした不満はさほど有益ではないし、命名という実践を現象として取り扱うのに比べてはるかに

重要性が低い。エヴァンズ＝プリチャードとそのインフォーマントを、名前の使用方法に首尾一貫性がないと批判する代わりに、そうやって名前の「首尾一貫性なく」使用しても、社会的な出来事について、見掛け上は首尾一貫して覚知可能（intelligible）な記述がもたらされうるのはいかにしてなのかという問いがたてられるだろう。というのは、彼が名前を使用するその仕方がその説明に意味を与えているとするのなら、エヴァンズ＝プリチャーズの説明を覚知可能で首尾一貫したものとして読むことができるからである。

集成にある名前を指定することによって、さらなる記述を進めていくためのやり方がうちたてられる。この名前は、一度指定されると記述のための装置となるという点で、単に記述的なものではない。すなわち、この名前は出来事に照らして修正されるべきものではなく、むしろ、どんな出来事が生じようと、その記述に用いられるべきものなのである。「ザンデの薬」または「バカの薬」といった名前は、当初、これらの薬についての知識が発見された構成的な契機の特定化として使用されたとしても、バカの薬に関する知識がバカの成員以外の人々により発見されたことで、これらの名前を撤回しなければならないわけではない。むしろ、それらの人々の知っていることが、今やそのうちのいくつかはすでに「バカの薬」と命名された知識の要素であったという事実に言及することで記述されなければならないのである。このように、ボグワォズから学んだ後、ザンデは「バカの薬の知識を保持している」とでも記述されるかもしれない。

一旦、知識の集成が命名を受けると、その名前は記述の・ための・装置として使われ、その集成の流通を構成している契機を文字通りに記述していると解釈することはできない。このことは、結局、集成と協同体の間に何の関係もなく、名前が共通しているのは単なる偶然だということを意味するのだろうか？その名前が文字通りの記述を意図していると考えるのは誤りである。その名前は、けっしてその集成が流通しているところの人々を記述しようとはしていない。それよりも、その集成がその構成の契機に対して持つ関係、すなわち所有関係に類似した関係を特定しようとしているのである。したがって、バカの薬といったような知識の集成への命名は、その薬がバカによってのみ知られていることを意味するのではなく、むしろ、ある意味で彼らに「所属する」そうし

た薬が彼らによって「所有されている」ように見えるということを意味する。マルクス主義者がブルジョアという信念のカテゴリー化をブルジョア階級の人々に特有の考えであるとみなさないように、エヴァンズ＝プリチャードのインフォーマントは「バカ」として記述される知識をバカのすべての人々が、そしてバカの人々だけが知っていると主張しているようには見えない。ブルジョアのイデオロギーとバカの薬は、誰がそれらを受け入れているかにかかわらず、それぞれ、ブルジョア階級とバカに「所属する」のである。

ここで、「所有権」とは物に対する内的および外的な権利を意味するということに注目したい。所有される物に関する単純な事実として、たとえそれが所有者以外の人に保持または使用されている場合でも、所有物としての地位には何の影響もないということが挙げられよう。あなたは私の家に住むことができるし、車を借りることや私のペットの世話をすることもできるが、依然としてそれらを所有しているのは私である。あなたが私の家に住んでいるという事実は、それが「私の」家であるという記述には影響を与えないが、あなたの活動や環境、あるいは性格についての記述に対しては、おそらく確実に影響を与えるだろう。私の車を運転している時、あなたはそれを「借りる」または「盗む」という行為に従事しているし、私の家に住むことは、もしかしたらあなたには住むべき家がないということを意味しているのかもしれないし、そして、私のペットの面倒をみるのは、あなたの好意の表れであるとも言えるだろう。ある物が一旦、誰かの所有物であるとみなされると、私たちは、それをいま現在、保持または使用している所有者以外の人の活動を、それが誰かの所有物であるという性格に言及することで記述し、おそらくは彼らと所有者との関係を再認識するだろう。とはいえ、所有関係についてはその記述を変更する必要はないのである。

まさに所有権に関わるこれらの事実によって、誰がその集成を受け入れているのか、またその構成契機に照らしてその名前を変えるべきか否かということに煩わされることなく、所有権という考えを、知識の集成およびそれと協同体との間の関係の考察に有効に適用することができるのである。その代わりに私たちは、知識の集成の名前が、特定の協同体によるその集成の所有権を示すものとしてその成員に慣行的に受け入れられているという事実に基づき、人々が

どのようにして現在行なっているような方法で世界を記述するようになったのかについても理解していくことができる。

タイのルーの人々の文化的な特色の記述に取り組んでいる［Michael Moerman,1967］(1)は、記録の目的で、ルーの成員に対して彼らの文化的な特色を特定するように求めた。その願いを聞き入れた人々は、髪形、装飾品、用具といった物を挙げた。しかし、Moermanは、ルー以外の人々も「ルー」として特定されたのと同様の髪形や装飾品を使用していると述べている。この事実がルーのインフォーマントに対して指摘されたさいに、彼らは自分たちの間違いとは認めず、ルーとその隣人たちは同様の様式を持つがゆえに、事実上そこにはルーではない文化など存在しないと主張した。彼らは、それらの隣人のことを「模倣者」として特徴づけた。そうだとすると「ルー」としての実践を同定することは、単にある実践を同定することにとどまらない。それは、ふたつの人々の関係を変換するものである。ルーとその隣人はただ偶然に「ルーの実践」と呼ばれるものを共有するのではない。むしろその隣人たちは、ルーからその実践を学んだと見なされており、それを使用している点で、模倣したとされるのである。もし私たちが共有知識を、単に共有されている知識としてだけ取り扱うとしたなら、現在、社会構造の中に慣行的に見ることのできる、人々と協同体とのある種の関係は存在しないということになってしまうかもしれない。私たちが文化的な要素の所有権をその一方に帰属させないなら、二つの協同体の関係は彼らが同じ知識や信念を分けあっていることによる類似性以外のなにものでもないということになってしまうだろう。しかし、その信念が一方の所有に帰属されうる場合には、それらの協同体を非対称的な関係にあるものとして認識することができる。ラテン・アメリカの政治に関する簡単な議論で、ここでの問題点を示すことができる。Emmanuel de Kadtは、ラテン・アメリカの政党に関する研究のある議論において、次のような観察を行っている。

> Alan Angellは…政党は寡頭制の単なる道具としてではなくて、むしろ、あらゆる階級の政治的野心家たちからなる密集体とみなされるべきだと提言している。これは興味深い観点ではあるが、梯子の下方の者たちの、その上方に位置する者たちへの同一化や関心の深さの度合

いを過少評価しているようである。　[de Kadt,1967:468]

ここでは、政治的な組織という社会構造に関する二つの観点が示されている。一方において、「多元的な民主主義」とでもいうべき観点、すなわち、政党は異なる社会階級の人員から抽出された職員から構成され、したがって、ある特定の社会階層に結びつくものではないという観点が存在する。このようなセッティングのもとで、政党の構成員が同じ信念を保有することは社会階級の成員として規定されている一線を越えるコンセンサスの出現を表している。政党は様々な社会階層から抽出された人々によって構成され、そこには彼らの社会階級への加入とは独立に、政党の構成員の間にいくつかのコンセンサスが存在しているというこれら同一の事実は、信念や関心の所有権を「上位の」機構に帰属させるという簡単な方法により、政党が全面的に社会階級に従属するような政治組織の姿へと二者択一的に再構成または変換されうる。こうした社会的な地位の高い人々と低い人々が同じ信念に賛同しているという事実は、もはや、異なる社会的な地位の人々の間における単純な同意とは考えられなくなる。すなわち、今や低い地位の人々は、高い地位の人々の考えを受け入れ、彼らと自己同一化し、その意見を表現しているとみなすことができる。集成の所有権をどの協同体にも帰属させないのなら、自分たちがその構成員でない協同体と「同一視」している人々について語ることはできなくなり、また私たちが現在しているような仕方で「かいらい」「代弁人」あるいは「寡頭制の道具」といった社会的なタイプによって社会構造に現実感をあたえるということも不可能になるだろう。

そこで、集成の名前を協同体と集成との所有関係を認識しているものであるとして取り扱うと、その協同体の成員であるか否かを問わず、社会の人々の活動を解釈する方法が私たちに与えられる。また、それは私たちの行為の誠実さ（*bona fide*）を評価し、日常生活での行いと社会学的な達成の双方にとって基礎となる外観と実体との区別を管理する方法を与えてくれる。ある人間の活動が、彼が属さない協同体に所属する知識の集成を前提にしているかどうかを考察することは、彼の活動が彼自身のためでなく、他人と同じに見えるように、または彼らの発想や興味を表現しようとするもので、模倣、体現、あるいは代

理といった諸活動であるということを、私たちが発見するための基礎を与える。したがって、ラテン・アメリカにおける寡頭制政治のもとで、私たちは地位の低い政治家が単に自身の信念を主張するのではなく、実際は彼らの上位に位置する者のそれを表現していることを見い出だすことができた。ルーの隣人たちの場合では、彼らが単に慣行的に活動しているのでなくて、実際はルーのようになりたいと切望していることを、私たちは発見することができる。

また、集成の名前を所有関係の表現として取り扱うことは、私たちが成員の活動の中に社会構造というもの何らかの作用を見い出だすことを可能にし、協同体同士の関係を観察可能にする方法を与えてくれる。したがって、呪医ボグワォズの知識を「バカの薬」として同定することは、彼の諸活動を観察するある特定の方法を与える。すなわちそれらは、ザンデ族の社会の*中での*変革を表すのではなく、ザンデ族と他の文化との交流、及びその文化の借用を意味している。同様に、東洋風として同定される概念を西洋社会の成員が採用することは、それらの人々が西洋社会から離脱し、東洋社会と同一化しているということを見い出だす方法を与えるのである。

知識の所有から知識の集成の概念に至る、これまでの議論で問題のすべてが出尽くしたわけではないし、所有権という例えに関する議論さえ十分とは言えない。そこには、所有者や他の人々が被所有物をどう取り扱うかという問題が常に存在している。車の所有者は、それを運転したり、車庫に保有したり、廃棄したり、貸し出したり、ぶつけたりできる。所有権は、何がなされ何をしてよいかを決定する権利を与えると同時に、義務と責任を生じさせる。この例えは知識の集成の研究に対して、より有効に応用されるかも知れない。

〈注〉

(1) 'Accomplishing Ethnicity', in Turner, Roy(ed.), *Ethnomethodology* : 54−68, Penguin. を参照。

〈文献〉

Evans=Pritchard, E. E. 1937 *Witchcraft, Oracles and Magic among the Azande*, Oxford University Press.

De Kadt, E 1967 'Review of Paul Halmos (ed.) "Latin American Sociological Studies", *British Journal of Sociology 18.*

Moerman, M. 1967 'Being Lue Uses and Abuse of Ethnic Identification', Proceedings of Spring 1967 *Meetings, American Ethnological Society* : 153−69.

訳者解説：シャロックを読む

（原題；"On Owning Knowledge", in Turner, Roy.(ed.) *Ethnomethodology* : 45−53. 1974）

本論文の著者であるシャロック教授は、現在、マンチェスター大学の教授である。彼は、B.A.を University of Leicester で、*Concept in Action: A Sociological Analysis of Ideological Activities.*［Sharrock,1970］と題する論文によって1970年に University of Manchesterで Ph.D.を取得している。シャロック教授は、1965年に、当時、人類学部の下位領域であった社会学を専攻する教官として、マンチェスター大学に赴任した。彼は、ヴェーバーの理解社会学をもとに社会学をひとつの専門領域として確立したいという願いをもっていたという。そして、彼は1960年代の末にエスノメソドロジーと出会った。その後、1972年にマンチェスターを訪ねたハーヴィー・サックス、ディビッド・サドナウらと、つづいてハロルド・ガーフィンケルやアアロン・シコレルとも親交を結ぶにいたった。

その後、イギリスでのエスノメソドロジーは、周密な学問領域として順調に展開していく。そして現在は、いみじくもドロシー・スミスが、「シャロックらのオーソドックス・エスノメソドロジスト」たちと呼ぶような(1)、ひとつ

の学派を形成するにいたっている[2]。また、シャロック自身、最も多作のエスノメソドロジストのひとりであり、1990年にまとめられた文献表［Coulter, 1990］には、共著のものも含めて42もの論文、著書が掲載されている。この解説では、そのすべてについて紹介することはできないので、ここでは、まず主要な著作群を挙げ、本論文の性格を理解する上で重要な学問上の系譜について解説を加えよう。

現在入手可能かつ最近10年以内に出版されたものに限ってみても、その著書はエスノメソドロジーの入門書としても名高い ***The Ethnomethodologists.*** ［Sharrock & Anderson,1986］、社会学全般を論じている ***Perspectives in Sociology*** ［Third Edition］. ［Cuff,Sharrock & Francis,1992］、哲学との関連を論じる ***Philosophy and Human Sciences.*** ［Anderson,Hughes & Sharrock,1988］、そして、企業の実際の活動についてフィールドワークに基づいた、またワークの研究の一例としてガーフィンケルからも評価を受けている ***Working for Profit.*** ［Anderson,Hughes & Sharrock,1989］など、社会学の入門書から、社会学の哲学的な基盤を論じた著作、フィールドワークに基づいた経験的な研究にいたるまでその著作は多岐にわたっている。

また主要な理論的論文としては 'The Social Actor'. ［Sharrock & Button, 1991］、'Autonomy among Social Theories'. ［Sharrock & Watson,1988］、'Something on Accounts'. ［Watson & Sharrock,1991］などがある[3]。

本論文がなにを語っているのかについては、とにかく読んでもらうしかない。内容はきわめて明確かつ簡潔である[4]。それゆえ、むしろここでは、本論文をとりかこむ文脈を提示したい。本論文は、まず、エスノメソドロジーの知的伝統のうえでは、初期サックスのカテゴリー化論の系譜に位置づけることができる。訳者がこの論文の訳出を思い立った一因としても、それ自体としては難解なサックスの初期著作を読み解くさいの道標になればというものがあった[5]。本論文を、すでに邦訳され、あるいは、邦訳が予定されている［Sacks, 1963＝f.c.］［Sacks,1972a＝1989］［Sacks,1972b＝f.c.］といったサックスの著作や同じくカテゴリー化論の系譜に属する［Watson,1978］［Watson, 1983＝f.c.］とあわせて読んでいただければ、幸いである。

本論文が社会学という文脈でもっている、エスノメソドロジーとは別のひとつの意義を提示してみよう。それは、伝統的な社会学にとって、代替的な社会学を構想するシャロック教授の社会科学観は、ピーター・ウインチのそれと親和的であるということである。本論文も、この点で、ウインチの営みを継承している論文であるといえよう。そしてこれは、すでに述べたようなイギリス社会学がおかれている位置に由来する課題、すなわち、人類学的な記述に対抗しうる社会や文化についての理解と記述を提出するという課題にむかっている。他にこの系列の論文としては、'On the Demise of the Native' [Sharrock & Anderson,1982] 'Magic,Witch-craft,and the Materialist Mentality'. [Sharrock & Anderson,1985] がある。

ウインチとの関連からも想像できるように、シャロック教授の社会学は、後期ヴィトゲンシュタイン哲学の影響を受けている。この側面においても、彼のイギリス社会学界での影響力はきわめて大きい。彼は、社会学へのヴィトゲンシュタインの紹介者としても知られている。ただし、彼、およびマンチェスター学派に属するエスノメソドロジストのヴィトゲンシュタイン理解は、日本で流通している懐疑論的なヴィトゲンシュタイン解釈とは性格を異にしているという点は重要である。すなわち、彼はクリプキのヴィトゲンシュタイン解釈に基づいた社会構成主義的な社会学とは対照的な、ヴィトゲンシュタインーベーカー、ハッカー [Baker & Hacker,1986] ーエスノメソドロジー、ないしは、ヴィトゲンシュタインーウインチ [Winch,1965=1977] ーエスノメソドロジーという系譜から、エスノメソドロジーの哲学的な立場について論陣をはっているのだ(6)。そして、本論文での彼の立場は、懐疑論の対極にあるような、まさにそういった立場である。

以上、シャロック教授の業績と本論文をとりまく文脈について概説してきた。ここに訳出した論文とともに、この解説が、日本のエスノメソドロジー、ひいては社会学の発展に資することができるなら幸いである。

*訳者は、昨年(1994年)の夏、筑波大学社会科学系の樫田美雄氏とともにマンチェスター大学にシャロック教授を訪ね、貴重な文献をいただいたうえ、イギリスでのエスノメソドロジーの展開などについて教えをうけた。感謝したい。

また、マンチェスター大学に留学中の池谷のぞみ氏には、マンチェスター滞在中、およびその後のシャロック教授との連絡にさいしてたいへんお世話になった。感謝したい。

訳出にさいして、慶応大学大学院の浦野茂氏、東京大学大学院の鈴木敦子氏、埼玉大学大学院の臣永啄也氏、およびハワイ大学大学院の宮野稔氏に助力をいただいた。感謝したい。とはいえ、すべての誤りの責任は訳者にある。

最後に、シャロック教授には、私のような浅学のものに訳出の許可をいただいたことに感謝したい。

〈注〉

(1) 1995年、7月の来日時に開かれた国際基督教大学でのセミナーでの発言による。

(2) エスノメソドロジーにおける諸学派の詳細については、訳者による「社会構成主義の現在」「いくつのエスノメソドロジーがあるのか？」［岡田,1994a］［岡田,1994b］などを参照していただきたい。

(3) この他、最近は、コンピューター・ソフトウエアのデザインの研究を行なっている。シャロック教授のこの部分の研究については、「相互的行為としてのソフトウェア・デザイン」［岡田,1995］を参考にしていただきたい。

(4) カテゴリー研究をしている代表的なエスノメソドロジストたちは、本論文を「ある知識は、*要請*としてあるカテゴリーの成員によって所有されているように思われる。成員性カテゴリーは、そういった知識の帰属にとっての可能な焦点というものを構成している」［Watson,1978］、また「成員たちがどうやって他者の主張の信憑性を割り振っているのか」［Coulter,1991］、そして「知識の集成と協同性との間の関係」［Jayyusi,1991］を扱っているとして性格づけている。また、ここでは名前について述べられている「所有」の問題について、サックスは1966、1967年の講義［Sacks,1992:vol.I:382−388,605−609］で主題として扱っている。シャロックらは、［Garfinkel and Wieder,1992:184−187］でガーフィンケルらの承認する探求の方法をもちいて警察の仕事や緊急通報について研究を進めている［Sharrock and Turner,

1978,1980]，[Sharrock and Watson,1988,1989]。

(5) 訳者が、彼に関心を持ったきっかけは、1992年の夏、ボストンで開かれた国際エスノメソドロジー／会話分析研究会で、彼の影響力の強さを目のあたりとしたことである。また、このときの様子については、「エスノメソドロジー25周年記念集会（Ethnomethodology: 25 Years Later）参加報告」[岡田,1992]を参照のこと。

(6) この点については「エスノメソドロジーと認知的構成論」[岡田,1994c]でより詳しく論じている。

〈文献〉

Anderson, Robert J., Hughes, John A. and Sharrock, Wesley W. 1988 *Philosophy and Human Sciences*, Routledge, Croom Helm,

_____ 1989 *Working for Profit: The Social Organisation of Calculation in an Entrepreneurial Firm*, Avebury.

Baker, G. P. and Hacker, P. M. S. 1986 *Scepticism, Rules and Language*, Blackwell.

Button, Graham (ed.) 1991 *Ethnomethodology and the Human Sciences*, Cambridge University Press.

Coulter, Jeff (ed.) 1990 *Ethnomethodological Sociology*, Edward Elgar.

_____ 1991 'Cognition: "Cognition" in an Ethnomethodological Mode' in Button, Graham (ed.), *Ethnomethodology and the Human Sciences* : 176−195.

Cuff, E. C., Sharrock, Wesley W. and Francis, David W. 1992 *Perspectives in Sociology* [Third Edition], Routledge,

Garfinkel, Harold and Wieder, Lawrence D. 1992 'Two Incommensurable, Asymmetrically Alternate Technologies of Social Analysis', in Watson, Graham and Seiler, Robert M. (eds.), *Text in Context* : 175−206.

Jayyusi, Lena 1991 'Values and Moral Judgement: Communicative Praxis as Moral Order', in Button, Graham (ed.), *Ethnomethodology and the Human Sciences*, : 227−251.

岡田 光弘 1992 「エスノメソドロジー25周年記念集会（Ethnomethodology : 25 Years

Later）参加報告」,『日本スポーツ社会学会ニュースレター』 3:6−7.

_____ 1994a 「社会構成主義の現在－社会問題のエスノメソドロジー的理解を目指して－」『年報筑波社会学』 5:1−46.

_____ 1994b 「いくつのエスノメソドロジーがあるのか？」『社会学論考』15:93−120.

_____ 1994c 「エスノメソドロジーと認知的構成論」『Sociology Today』 5:84−96.

_____ 1995 「相互行為としてのソフトウェア・デザイン」『現代社会理論研究』5:117−126.

Sacks, Harvey 1963 'Sociological Description'. *Berkley Journal of Sociology*. 8:1−16.→ Coulter, Jeff (ed.) 1990:85−95. = f.c. 「社会学的記述」,椎野 信雄編訳『エスノメソドロジーという方法（仮題）』, 勁草書房.

_____ 1972a 'An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology', in Sudnow, David (ed.), *Studies in Social Interaction* 31−73:430−431, Free Press. → 1990 Coulter, Jeff (ed.):208−253. = 1989 「会話データの利用法－会話分析事始め」, 北澤 裕・西阪 仰訳『日常性の解剖学』:93−173, マルジュ社.

_____ 1972b On Analyzability of Stories by Children', in Gumperz, J. J. & Hymes, D. (eds.), *Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication*, Holt, Reinhart and Winston:329−345. → 1974 Turner, Roy (ed.) *Ethnomethodology*:216−232, Penguin. → 1990 Coulter,Jeff (ed.):254−270. = f.c. 「子どもの語る物語の分析可能性」, 椎野 信雄編訳『エスノメソドロジーという方法（仮題）』勁草書房.

_____ 1992 *Lectures on Conversation. Vol. I, II*, Blackwel.

Sharrock, Wesley W. 1970 *Concept in Action: A Sociological Analysis of Ideological Activities*, Unpublished Ph.D Thesis, University of Manchester.

Sharrock, Wesley W. and Anderson, Robert J. 1982 'On the Demise of the Native: Some Observations on and a Proposal for Ethnography', *Human Studies* 5(2):119−135.

_____ 1985 'Magic, Witchcraft, and the Materialist Mentality', *Human Studies* 8:357−375.

_____ 1986 *The Ethnomethodologists*, Ellis

Horwood.

Sharrock, Wesley W. and Button, Graham 1991 'The Social Actor: Social Action in Real Setting', in Button Graham (ed.), *Ethnomethodology and the Human Sciences* : 137–175.

Sharrock, Wesley W. and Turner, Roy 1978 'On a Conversational Environment for Equivocality', in Schenkein Jim (ed.), *Studies in the Organization of Conversational Interaction*, Academic : 173–198.

_____ 1980 'Observation, Esoteric Knowledge, and Automobiles', *Human Studies 3* : 19–31.

Sharrock, Wesley W.and Watson, Rodney D. 1988 'Autonomy among Social Theories: The Incarnation of Social Structure', in Fielding Nigel. G. (ed.), *Actions and Structure* : 56–77.

_____ 1989 'Talk and Police Work: Note on the Trafic in Information', in Coleman, H. (ed.), The Language of Work : 432–449, Mouton.

Watson, Rodney D. 1978 'Categorization, Authorization and Blame–Negotiation in Conversation', *Sociology 12* : 105–113.

_____ 1983 'The Presentation of Victim and Offender in Discourse: The Case of Police Interrrogations and Interviews', *Victimology 8(1/2)* : 31–52. = f.c. 「談話にあらわれた被害者と動機についての提示－警察による尋問と事情聴取の事例」, 岡田 光弘訳『Sociology Today』.

Watson, Rodney D. and Sharrock, Wesley W. 1991 'Something on Accounts', *Discourse Analysis Research Group Newsletter 7(2)* : 3–12.

Winch, Peter 1958 → 1965 *The Idea of Social Science and its Relation to Philosophy*, R. K. P. = 1977 森川 真規夫訳『社会科学の理念－ヴィトゲンシュタイン哲学と社会研究』, 新曜社.

（訳＝おかだ　みつひろ／筑波大学大学院）